論文

台湾の「たいまつプログラム」にみる言語の教育方法

――『新住民母語生活学習教材』の分析――

黄　琬茜[†]

要旨：台湾における国際結婚は年々増加し，それらの新移民の子どもが就学する数もどんどん増えてきている。2012 年には，小中学校に就学している「新台湾之子」が 20 万人を超えた。台湾政府は，台湾が本格的な多文化社会になるために，近年，国際結婚家庭をサポートする政策やプログラムなどを積極的に推進している。そして，2012 年には「全国新住民たいまつプログラム（全国新住民火炬計画）」を策定した。これは，新移民の人々と台湾人の関係をより良くするための，学校を中心として行われるプログラムと言える。この「たいまつプログラム」では，新移民の母語・文化を継承するため，小学校でその母語学習のコースを設けた。そして，このコースのために，『新住民母語生活学習教材』を開発し編成した。しかし，授業中，その教材はほとんど採用されていなかったことが報告されている。

本研究の主な目的は，その教材の構成やその長所と短所を分析した上で，子どもの言語学習教材として適切であるかどうかを明らかにすることである。また，なぜ，その教材が教師に採用されなかったのかについても考察する。

キーワード：たいまつプログラム，教育方法，言語教材，新台湾之子，母語

目次

1. 背景
　1-1.「たいまつプログラム」策定の経緯と内容
　1-2. 教科に関する教科書・教材の評価指標
　1-3. 郷土言語に関する能力指標
2. 目的と方法
3.『新住民母語生活学習教材』の分析結果と考察
　3-1. それぞれの教材とレッスンの構成と特徴
　3-2.「教科書・教材の評価指標」を基準にした分析結果
　3-3.「言語学習の能力指標」を基準にした分析結果
　3-4.『新住民母語生活学習教材』に対する他の注意すべき点
4. 結論
　4-1.「たいまつプログラム」における言語教育環境と言語教材
　4-2. 本研究の限界と今後の課題

[†]同志社大学大学院社会学研究科教育文化学専攻博士後期課程
*2016 年 2 月 25 日受付，査読審査を経て 2016 年 3 月 31 日掲載決定

1. 背　景

1-1.「たいまつプログラム」策定の経緯と内容

海外から台湾への人口移動は，主に 1990 年ころに始まった最初の労働者の移民から，2000 年ころに始まった結婚移民まで，この数十年間で，台湾における人口およびその構成を大きく変えつつある。現在，台湾の結婚総数におけるおよそ 13％ - 15％ を占めている中国本土および東南アジアから来た結婚移民は，移民のなかでの割合が最も多く（入出国および移民署による統計，2013），そのうち，女性の配偶者が 9 割もあった（戸政司，2015）。そして，台湾政府は，結婚移民で台湾に来た配偶者の生活適応をサポートするため，2005 年には「外国籍配偶者を支援する補助金」という名目で，10 年間で 30 億元の予算を組むことを決定した。

大勢の新移民女性が台湾に来たことにより，台湾の少子化問題は改善されるようになった。2013 年の台湾の教育部（日本の文部省科学省にあたる。以下，「教育部」）の統計によると，新移民女性に生まれた子どもが小学校に就学した数は 20 万人を超え，全就学者の 11％ にも達した。したがって，2012 年 3 月に，内政部（日本の総務省，外務省にあたる）と教育部は新移民とその子どもへの支援を徹底するため，「全国新住民たいまつプログラム（全国新住民火炬計画）（以下，「たいまつプログラム」）」という 3 年間のプログラムを立て，実施した。その「たいまつプログラム」の中には，新移民女性の母語の言語教育を重点小学校[(1)]に導入したということが一つの画期的な出来事であったと考えられる。

同時に，政府は，新移民女性の家族やその子どもに，新移民女性の母語と文化を，より認識させたり，継承させたりするため，その母語と文化の教材化に力を注いだ。今までの新移民が母語を教える時には，特にテキスト（書きことば，や文字）などは用いずに，主に口頭（話しことば）で教えること，あるいは，教師自身で教材を作ることが多かった。また，現在の台湾社会において市販されている東南アジア言語の教材や言語学習の本などのうち，中国語で対訳するものが極めて少ないので，勉強しにくいと考えられていた。そのような事情があり，政府は『新住民母語生活学習教材』という教材を開発し編成した。そして，ベトナム語，インドネシア語，タイ語，ミャンマー語，カンボジア語というそれぞれの 5 つの母語に関わる教材が作成された（図 1 を参照）。上記から，政府の「全国新住民たいまつプログラム」は，まさに，台湾をもう一歩，多文化多言語社会へ強く推進する教育政策であった，と言えよう。

ところが，政府が新移民女性の母語の言語教育を小学校教育に導入するため，『新住民母語生活学習教材』を開発し編成したにもかかわらず，2013 年の移民政策国際セミ

図 1　『新住民母語生活学習教材』

ナーかつ「全国新住民たいまつプログラム」の成果報告によると，そのような教材があることが広く認識されておらず，各教師が各自で教材資料などを作成したため，必ずしも児童・生徒の学習に適していたわけではないということが指摘されていた（全国新住民火炬計畫成果展の報告書，2013）。さらに，著者が 2015 年に小学校の母語学習コースの教育現場に伺って授業観察をしたり，教師たちにインタビューしたりした結果，教師たちは現場で『新住民母語生活学習教材』を使っておらず，その教材が難しく，不適合，母語の授業に役に立たないなどの意見をもっているという実情が明らかにされている。つまり，その母国語教師としての新移民女性たちが，授業で『新住民母語生活学習教材』を実際に使用することは，ほとんどなかった。本研究では，なぜ『新住民母語生活学習教材』が使用されなかったという理由を検討する。それを踏まえ，その教材の問題点を指摘し，優れた点を教師，学習者などへ発信することに意義があると考えられる。

1-2. 教科に関する教科書・教材の評価指標

それでは，なぜ『新住民母語生活学習教材』が使用されなかったのだろうか。その原因を解明するため，台湾の教育部が定めた教科書・教材の評価指標を基準として，その内容やレッスンの構成や教育の効果を検証する。台湾の教育改革史において，2001 年に試行・2004 年に全国実施された「国民中小学九年一貫課程綱要（以下，「九年一貫課程」）[(2)]」と称される教育政策は，近年の最も重要な教育改革だと考えられる。「九年一貫課程」が策定された教育課程の基準に従って，各学校は各自の教科書や教材を編成することができる，というのは初めてのことであった。そのため，教育部は，各学校の教

科書や教材を一定の基準に基づいて編成できるため，2001 年に，「九年一貫課程」の各学習領域[3]の教科書・教材の評価指標[4]を定めた。それぞれの教科書・教材の質保障のため，ざまざまな分野における教師，専門家，学者，研究者，教科書・教材の編集者，さらに保護者，一般の社会人に至るまで，意見や提案を集めて，その教科書・教材の評価指標を定めた（教育部，2003）。その評価指標の内容は「6 大要点」に大きく分けられ，また，それぞれの「要点」と学習領域に応じて合わせて，基本的に 30 程度の細目がある（表 1 を参照）。『新住民母語生活学習教材』は新移民の母語・文化を中心に編成されたものである。その内容が，言語学習の教材として子どもに適切であるかどうかを明らかにするため，上記の「言語」学習領域における「国語」の教科書・教材の評価指標を基準にし，検討する。

1-3. 郷土言語に関する言語学習の能力指標

1979 年に戒厳令が解除された台湾では，「民主化」，「自由化」，「本土化[5]」をベースとする教育改革も含む社会諸側面の改革が進行した。その「本土化」が進むことによって，かつて厳しく制限された台湾語（閩南語）については，台湾土着の知識や教育をもう一度重視するようになってきた。1995 年，教育部は郷土言語の教育を義務教育に入って実施するという政策を作った。その後，「九年一貫課程」では，さらに，郷土言語を週に 1 コマを授業するという規定があった。そのため，「九年一貫課程」における「言語」学習領域には，「国語」だけではなく，郷土言語に関する基本理念（4 項目），基本技能と課程目標（10 項目），能力指標（5 項目）などの基準も定められた。現在，小中学校で教授する郷土言語の教科には，台湾語（閩南語），客家語，原住民語がある。郷土言語に関する教科書・教材の評価指標は，それぞれの言語によって多少異なる部分があるが，原則として，「国語」の教科書・教材の評価指標の内容に類似している（藍，2006）。一方，教育部は児童・生徒にさまざまな言語能力を身に付けるため，学習段階に分けて「聞く能力」，「話す能力」，「ピンイン能力」，「読む能力」，「書く能力」という前述の能力指標（5 項目）も定めた。言語の学習段階は，1-2 年生を第 1 段階に，3-4 年生を第 2 段階に，5-6 年生を第 3 段階に，7-9 年生を第 4 段階に分けられるという 4 段階がある。また，それぞれの能力に応じて，到達目標の項目もある。郷土言語である台湾語（閩南語）を具体例として，「聞く能力（4 段階 26 項目）」，「話す能力（4 段階 31 項目）」，「ピンイン能力（4 段階 11 項目）」，「読む能力（4 段階 17 項目）」，「書く能力（3 段階 12 項目）」という能力指標（5 項目）も定められている（教育部，2008）。

郷土言語の学習は新移民の母語学習と同じように言語学習の一環であると考えられているため，教育部が定めた郷土言語の学習に関する能力指標も，本研究で用いるもう一つの基準として教材の分析を行う。

2. 目的および方法

新移民の母語および文化の継承に関する『新住民母語生活学習教材』という多言語多文化教材は，教育部が定めた「教科書・教材の評価指標」と「言語学習の能力指標」を基準にし，適切な言語教材として編成されること，およびそれぞれの言語学習の目標への達成度を評価して分析することを目的とする。そして，同じ基準に従い，その内容とレッスンの構成に対して，それぞれの言語的，文化的な側面において言語教育に役立つかどうかを明らかにする。また，その内容とレッスンの構成について分析し，それぞれのメリットとデメリットを明らかにする。さらに，その分析結果を踏まえ，小学生に相応しい言語学習の教材であるかどうか，また，なぜ，その教材が教師に採用されなかったのかを考察する。

教育部が定めた「教科書・教材の評価指標」による評価を与える方法について，学習領域による主に「6 大要点」に基づいたそれぞれの細目内容に対して，著者による 4 つの評価（「『○』：問題なし」，「『△』：改善余地あり」，「『×』：問題あり」，「『－』：評価不可能」）で判断する。本研究では，「言語」学習領域における「国語」の教科書・教材の評価指標を基準にし，それぞれの細目内容に評価を与える（表 1 を参照）。また，タイ語の教材を中心に分析のモデルとして分析を行う。

また，「郷土言語に関する言語学習の能力指標」による評価を与える方法について，5 つの能力（「聞く能力」，「話す能力」，「ピンイン能力」，「読む能力」，「書く能力」）における，4 つ学習段階によるそれぞれの目標項目に対して，著者による 4 つの評価（「『○』：問題なし」，「『△』：改善余地あり」，「『×』：問題あり」，「『－』：評価不可能」）で判断する。本研究では，「郷土言語である「台湾語（閩南語）」の学習の能力指標」を基準にし，それぞれの項目に評価を与える（表 2 を参照）。また，同じのように，タイ語の教材を中心に分析のモデルとして分析を行う。

3. 『新住民母語生活学習教材』の分析結果と考察

3-1. それぞれの教材とレッスンの構成と特徴

5 つの母語に関わる『新住民母語生活学習教材』は，各母語に応じて開発・編成されたものの，基本的なレッスンの構成や特徴は共通している。すなわち，5 つの教材の編成内容は，①会話内容，②新出単語，③単語の入れ替え練習，④「文化教室」，⑤童謡・歌，⑥練習問題という 6 つの内容と順序で構成されている。それに，各教材のレッスンのトピックも同じである。第 1 課から第 15 課は基礎編であり，第 16 課から第 30 課

は応用編である。それぞれのレッスンの構成と特徴は，以下に詳しく述べる。

構成内容について，第一には，会話である。基礎編（第 1 課から第 15 課まで）の会話内容において，各レッスンに会話例が二つある。一つ目は，台湾の生活に関するものであり（図 2），もう一つは，新移民女性の母国や母語文化に関するものである（図 3）。しかし，応用編の第 16 課に入ると，会話内容の文章が長くなるため，新移民女性の母国文化に関する内容は削除され，台湾の生活や文化に関する内容に偏って編成している。基礎編の会話内容について，具体例を取り上げると，第 3 課「登校」というトピックにおいて，子どもは学校へ行く時，その日の授業に合わせて学校の制服などを着ることを教える。図 2 と図 3 を見ると，図 2 の台湾文化の内容には，台湾の小学生のジャージの写真がついている一方で，図 3 のタイ文化の内容には，タイの小学生の男女の制服とジャージ，シルクを身に付けた正装の写真にわけられてついている。また，各文章は，新移民女性の母語と台湾の中国語の両言語で書かれている（図 2 と図 3 を参照）。

上記のタイ語の母語教材の会話内容をモデルとして示しているように，同じの編成の基準に基づいたベトナム語の母語教材の会話内容はどのようなものであろうか。ベトナム語の母語教材においても，タイ語の母語教材と同じのように，第 3 課「登校」というトピックがある。そして，会話内容の部分も，一つ目は台湾の生活に関するもので，もう一つは，ベトナムの生活や文化に関するものである。一つ目の，台湾の生活や文化を教える内容は，タイ語の母語教材とベトナム語の母語教材は全く同じの会話文と写真を使用している。つまり，ただ異なる言語で同じの会話内容を作成したものだけである。それに対して，もう一つの新新移民女性の母国文化を教える内容は，原則として「登

図 2　会話内容 A

図 3　会話内容 B

校」というトピックに従い，ベトナムの小学生はどんな服装を着て学校へ行くか，という会話内容になっている。また，ベトナムの学校の制服の写真もついている。つまり，この部分において，トピックは同じではあるが，会話文はそれぞれの国の文化や風土などによって変更したり，単語や言葉遣いなども変えている。無論，写真の紹介も国によって入れ替えている。それ故に，他のインドネシア語，ミャンマー語，カンボジア語の母語教材における第一の会話内容に関する編成のやり方も，上に述べたように推測される。

第二に，新出単語である。基礎編であれ，応用編であれ，それぞれのレッスンにおいて集録語彙数は 15 語から 40 語以内に抑えられている。また，重要な単語を赤色文字で表記している。5 つの言語教材の集録語彙数は，それぞれのレッスントピックと会話内容によって，語彙数が多少，異なるが，原則として 40 語以内で作成されている。

第三に，単語の入れ替え練習である。すべて，一つか二つのセンテンスを入れ替える練習がある。具体例を言うと，ベトナム語教材の第 9 課の「バーゲン」での単語の入れ替え練習において，センテンス 1 では，「私は T シャツ（スカート，半ズボン）を買いたい」。センテンス 2 では，「土曜日（日曜日）に，私たちは一緒に夏の服（冬の服）を買いに行こう」。一方，ベトナム語の教材と同様に，インドネシア語の第 9 課の「バーゲン」に関する単語の入れ替え練習では，「土曜日（明日，クリスマス），私たちは一緒に新しい服（スカート，クバヤの伝統衣装（kebaya：インドネシアの伝統衣装））を買いに行く」，および「私は服（T シャツ，ネクタイ，ズボン）を買う」という二つのセンテンスを練習させている。したがって，他の言語の教材も，そのレッスンのトピックに合わせて，一つか二つのセンテンスの入れ替え練習を作って練習させている。また，上記のベトナム語やインドネシア語の例文のように，入れ替える単語の数の設定は自由である。

第四に，「文化教室」と称される新移民女性の母国文化を紹介する内容である。それぞれのレッスンのトピックに応じて，その新移民女性の母国文化を紹介している。例えば，「晩ごはん」というトピックの場合，その新移民女性の母国料理や食文化を紹介している（図 4 を参照）。詳しく言うと，インドネシア語教材の第 6 課の「晩ごはん」というトピックに応じ，その「文化教室」の内容においては，インドネシアの家庭料理としてよく食べられるのは，Sayur という野菜に asam という調味料を入れて，Sayur asam という前菜料理を作ることができるという内容である。また，インドネシアの食文化に関するものも紹介している。インドネシアの伝統において，一般的に男性はご飯を作ったり，お皿を出したり，洗ったりするという家事をする必要がないということである。しかし，もし，姉妹が結婚して家にいない場合，一番年少の男性は，食後の簡単な片づけを手伝うこと，さらに，食事を終えた場合，スプーンとフォークを交差させて

置くというインドネシアの食事のマナーを教えている。

一方，タイ語の第 6 課の「晩ごはん」における「文化教室」では，タイの男性は自発的に家事をする必要がなく，家事は主に女性がやる。しかし，時代の変遷とともに，近年，男性は家事を手伝うことを受け入れるようになったこと，また，タイ人は，宗教的観点から右手は清潔であるが，左手は不清潔だと考えるので，相手に左手でものを渡してはいけないこと，さらに，食事の時，右手でご飯や料理を取るというタイの食文化の写真が付いている。それだけではなく，例えば，タイの文化に関して，新生児が満月を迎えた時，どのようにお祝いをするか，その祝いのやり方や慣習などが 2 ページにわたり書かれてある。

文化教室

一、Sayur：印尼語語詞上不做菜和非菜的根莖及瓜茄類的區分，統一稱為 sayur。Sayur asam 的作法是將各式蔬菜切塊或切段，加入酸果 (asam) 調味，是非常開胃的家常湯品。

二、印尼傳統中，男性不需要負責做飯、端菜、擺碗筷等家事；如果家中的姐妹們都出嫁了，身為晚輩的男性，也會協助餐後收拾及洗滌的工作。

三、黃薑飯 (Nasi kuning) 是印尼喜宴上常見的主食。當地人在祭拜或重要節慶、家庭聚會時，一定煮 nasi kuning，並且會把它做成寶塔造型，代表誠心及期許好運來臨。

四、割禮 (Sunatan) 原本是穆斯林的傳統，因此印尼穆斯林的男性在七歲以後，最遲結婚之前，必須將包皮割除。印尼人沒有滿月送油飯的習俗，但如果家中男孩在七到十二歲之間進行割禮，視同成年禮盛事，會廣發請帖邀請親友到家裡歡聚。

割禮

図 4　文化教室

上記に述べたように台湾文化と異なった「文化教室」の紹介は，各教材に 1 ページから 2 ページ程度，書かれている。また，すべての「文化教室」は，台湾の中国語でまとめているという，二つの共通の特徴がある。

第五に，童謡・歌である。各レッスンにおける童謡や歌の有無の違いである。インドネシア語の教材には，第 4, 5, 7, 8, 9 課などに入っている。タイ語の教材には，第 2, 3, 4, 8, 9 などに入っている。各教材は，国によって童謡・歌が違うのは言うまでもないが，唯一の共通点をあげると，童謡・歌の歌詞が，新移民女性の母語と台湾の中国語の両言語で書かれているということである。一方，応用編に入ると，童謡・歌という内容がすべて削除された。どちらの教材の応用編にも同様でこのパターンがデザインされていない。

第六に，練習問題である。単語の書く練習，読む練習，入れ替え練習，組み合わせ練習，絵を見て文を作成する問題（以下，「作文」）の練習などの項目がある。練習問題には，単なる一つ練習項目だけではなく，基本的に二つか二つ以上の項目がある。また，練習問題は，1 ページから 2 ページ程度であり，すべて台湾の中国語で練習のやり方を説明・指示している。

練習問題の部分では，基礎編と応用編において，その構成項目が明らかに異なっている。基礎編にある練習問題は，各教材において読む練習や入れ替え練習や組み合わせ練習や作文などの項目は，自由に配置することができる。例えば，インドネシア語の第

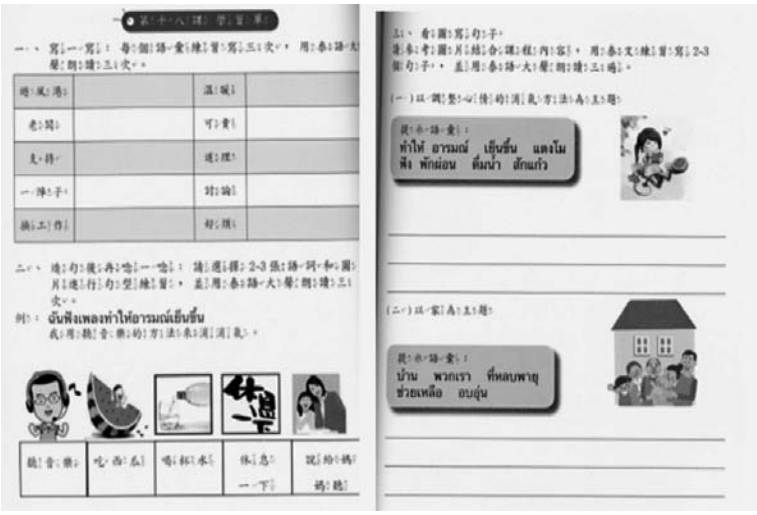

図 5　練習問題

11 課の練習問題は，読み書き練習とセンテンスを読む練習という二つの項目である。しかし，タイ語の第 11 課の練習問題は，読み書き練習と組み合わせ練習という二つの項目である。また，基礎編の作成内容と異なり，応用編に入ると，各教材の練習問題は内容がほとんど同じだと考えられるが，応用編から作文練習がデザインされている。具体的には，図 5 を見ると，タイ語の第 18 課（応用編）の練習問題において，読み書き練習，入れ替え練習，作文練習という三つの項目の練習があるとわかる。この部分は，インドネシア語やベトナム語も同様に読み書き練習，入れ替え練習，作文練習の項目の順で作成されている。そのうち，相違点はどこにあるか，問われれば，読み書き練習で取り上げられた単語が違うだけだと考えられる。

3-2.「教科書・教材の評価指標」を基準にした分析結果

教育部が定めた「国語」の教科書・教材の評価指標は，「6 大要点」とそれぞれの 28 細目がある（表 1 を参照）。タイ語の教材を分析のモデルとして，それを基準にし，それぞれの細目内容に対して著者による 4 つの評価（「『○』：問題なし」，「『△』：改善余地あり」，「『×』：問題あり」，「『－』：評価不可能」）で判断する。

表 1 を見ると，補助的な手立てという「要点」における 2 つの細目に対して，「評価不可能」という評価を与えた。タイ語の教材を勉強する時，補助的な道具として，それぞれレッスンの会話文に対する読み方や発音を教える CD がある。政府は作ったタイ語の教材が一種類しかないので，それに，現時点まで内容が更新された新しい教材もないので，継続研究および内容の更新という細目に「評価不可能」を与えた。また，生徒，教師と保護者へ諮問と資源を提供することという細目に対して，教材の内容にはそ

れに関する情報や土台などを書かれていないので，「評価不可能」と判断している。

一方，他の 5 大「要点」に対するそれぞれの細目は，「問題なし」，「改善余地あり」，「問題あり」という評価がされている。その中で，出版の特性という「要点」に対して最も高い評価が与えられている。次に，課程目標という「要点」において，「学年によって目標を達成すること」という要求があるが，『新住民母語生活学習教材』は基礎編と応用編のみに分けられ，そのどの部分の内容がどの学年の児童に向けた学習内容か，ということが明示されていないので，「問題がある」と特に指摘したい。この点について，次の小節から，より詳しく分析を行う。それから，学習内容という「要点」には，

表 1　教科書・教材の評価指標に関する内容と著者の評価（タイ語の教材）

6 大要点	計 28 個の細目	著者評価
1. 出版の特性	①わかりやすい文字と文の流暢性	△
	②図・画に合わせた適切な文字の使用	○
	③印刷の紙の質	○
	④印刷の綺麗さ	○
2. 課程目標	①課程綱要の能力の指標を実践できること，また，学年によって目標を達成すること	×
	②認知，感情，技能などの側面の配慮，また，ピンイン能力，聞く能力，話す能力，読む能力，書く能力などを身に付けること	△
	③学習者の心身の発達に応じること	△
	④具体的，明確的であること	△
3. 学習内容	①目標に有効的に達すること	△
	②正確な内容，また，ピンイン，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどを習得すること	△
	③文化の継承，時代背景と社会発展に合うことと	△
	④中華文化と他国の文化への適切な評価と価値観をもつこと	△
	⑤内容の実用性が高く，生活に役立つこと	○
	⑥分量が適当であること	△
	⑦時代にあわせた情報，ジェンダー，環境，人権，キャリア開発などの議題を内容に入ること	×
4. 内容構成	①多様化，よい構成の章と節	△
	②簡単から複雑へ，学習原理に合う学習内容の前後の順序	×
	③重要な学習内容を適度に継続すること	△
	④内容構成の各部分と各要素がうまく繋がること	△
5. 教授の実施	①生徒に探索と参与の機会を提供すること	○
	②個人差による言語教授と学習機会の提供	×
	③ピンイン，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどの内容に合わせる適合の教授方略の提供	△
	④多文化の言語学習の課程目標へ適切に反映した評価と練習問題の設計	△
	⑤生徒の学習動機，意欲を燃やすこと，また，自ら考えることから問題解決の能力を開発すること	△
	⑥生徒に言い表す機会，知識の習得の機会を与えること	△
6. 補助的な手立て	①継続研究および内容の更新	−
	②生徒，教師と保護者へ諮問と資源を提供すること	−
	③教科書の機能の増進に関する補助的な材料	△

注：「○」：問題なし，「△」：改善余地あり，「×」：問題あり，「−」：評価不可能

ほとんどの細目は「改善余地あり」であるが，適度にそれぞれの文化を紹介するタイ語の教材では，文化の継承という面に対してメリットがある。そのうち，特に，実用性が高く，生活に役立つ内容がほとんどであるということは賞賛できる。しかしその一方で，教材には，人権問題やキャリア開発などに関する内容はまだ不十分だと考えられる。また，内容構成という「要点」には，教材は基礎編（第 1 課から第 15 課まで）と応用編（第 16 課から第 30 課まで）に大きく分けられたが，簡単なものから複雑なものへ，学習内容の前後の順序という学習原理から見ると，「問題がある」と考えられている。すなわち，基礎編の第 1 課から第 15 課まで，単純な文法構造から複雑な文法構造へと発展するように紹介していないために，それぞれのレッスンの会話内容の長さや難易度が，ほとんど同じように見えるので，大きな「問題がある」と指摘したい。さらに，教授の実施という「要点」には，上述した問題点のように，教材の内容は難易度などがわかりにくいので，教師はどのように個人差に合わせた言語教授と学習機会を提供するか，という疑問をもっているため，この点に「問題がある」と判断している。

すなわち，表 1 の内容を含む上記の分析結果から，改善すべき大きな問題点がいくつかあるが，全体的に見ると，政府は作成したタイ語の教材が，教材としてざまざまな規定の条件をほとんど満たすと認識している。そこで，言語教材の視点から，タイ語の教材は合格の言語教材であるという結果が示されている。

3-3.「言語学習の能力指標」を基準にした分析結果

教育部が定めた郷土言語は，台湾語（閩南語），客家語，原住民語がある。そして，それぞれの能力指標は，そのことばの特徴や文化などによる目標が設定されている。現在，台湾において，公用語（標準語）である中国語以外には，台湾語（閩南語）が一番よく使われている（詹，1996；陳，2008；中川，2009；黄，2014）。そこで，本研究では，郷土言語である台湾語（閩南語）に関する言語学習の能力指標をモデルとして，『新住民母語生活学習教材』を分析する。台湾語（閩南語）に関する言語学習の能力指標は，学習段階を 4 段階（第 1 段階：1-2 年生，第 2 段階：3-4 年生，第 3 段階：5-6 年生，第 4 段階：7-9 年生）に分けられているが，新移民女性の母語の言語教育は小学校のみに導入されるので，第 1 段階から第 3 段階までの内容を表 2 に示す。また，表 2 には「タイ語」についての分析を示している。さらに，本研究のいくつの目的を明らかにするため，『新住民母語生活学習教材』を基礎編と応用編に分けて，それぞれの言語学習の能力目標への達成度を評価して分析する（表 2 を参照）。

教育部が定めた「郷土言語に関する能力指標」を基準として，著者による 4 つの評価（「『○』：問題なし」，「『△』：改善余地あり」，「『×』：問題あり」，「『－』：評価不可能」）を用い，『新住民母語生活学習教材』における基礎編と応用編を分析したそれぞれの評

表 2　各学習段階による 5 つの能力指標内容と著者の評価（タイ語の教材）

各段階	聞く能力	基礎編	応用編
第 1 段階 1-2 年生	①日常生活の短い会話文を聞き取ることができる。	○	△
	②教師が教えたことばと内容を聞いて，大体わかる。	△	×
	③視聴覚メディアを活用して，リスリング能力を向上させる。	−	−
	④他の人は話す時の感情と情緒を聞いて，大体わかる。	△	×
	⑤タイ語の音声に耳を傾ける習慣と態度を養う。	−	−
第 2 段階 3-4 年生	①日常生活のタイ語の語彙と文の音韻要素を聞いてわかる。	×	×
	②教師の教えたことばと内容を聞いてわかる。	△	△
	③コミュニティで常用のことばとイントネーションを聞いてわかる。	△	△
	④会話中に，タイの文化とコミュニティに関する話を聞いてわかる。	×	×
	⑤タイ語の一つの文字にある多くの発音を聞いて，大体わかる。	×	−
	⑥リスリング能力を向上させるため，科学情報と視聴覚メディアを活用する。	−	−
	⑦他の人が話す時の感情と情緒が聞いてわかる。	△	△
	⑧タイ語の音声に耳を傾けるマナーと態度を養う。	−	−
第 3 段階 5-6 年生	①タイ語の文の内容，知識と感情を聞いてわかる。	×	△
	②タイ語の文の内容を聞き，理解してから，さらに考えることができる。	×	△
	③人の話の中の重要な内容，異なる部分や意味を聞いてわかる。	△	△
	④タイ語の音調の変化，音韻，変音を聞いてわかる。	×	△
	⑤タイ語の音韻と発音の差異を聞いて，大体わかる。	×	△
	⑥タイ語を聞く時，生活中の重要な議題に注意を向けることができる。	×	△
	⑦科学情報と視聴学メディアを活用して，リスリング能力を向上させる。	△	△
	⑧耳を傾け，自発的にタイ語を学習する興味と習慣を養うことができる。	−	−
各段階	話す能力	基礎編	応用編
第 1 段階 1-2 年生	①日常生活の基本の語彙と短い文の会話が話せる。	○	△
	②タイ語で簡単な会話が話せる。	○	×
	③人に自分の生活を簡単に紹介することができる。	○	△
	④童謡が歌え，また，聞いたことを簡単な文でリピートできる。	△	−
	⑤タイ語で人に関心を示すことばや丁寧なことばが大体話せる。	△	△
	⑥タイ語で簡単な感情，情緒と要求が話せる。	△	△
	⑦積極的にタイ語で話す態度と習慣を養う。	−	−
第 2 段階 3-4 年生	①日常生活の会話文が流暢に話せる。	△	△
	②タイ語で先生，クラスメートや他の人と会話できる。	×	△
	③童謡・歌が歌え，また，簡単なことが話せる。	△	×
	④簡単なタイ語で周囲の人々，物事などが述べられる。	△	△
	⑤タイ語で感情，情緒と要求が話せる。	△	△
	⑥タイ語で人に関心を示すことばや丁寧なことばが話せる。	△	△
	⑦マスコミや読書などから，ことばを学習して，人とコミュニケーションをすることができる。	×	−
	⑧自発的にタイ語で人とコミュニケーションを取る態度と習慣を養う。	−	−
第 3 段階 5-6 年生	①各文，熟達したタイ語での発話ができる。	×	△
	②人と生活経験を流暢なタイ語で話せる。	×	△
	③タイ語で簡単なプレゼンテーションができる。	×	△
	④物事に対する描写，分析と解説をタイ語で話せる。	×	△
	⑤タイ語の文書体の語彙と用語を口頭文で話せる。	×	△
	⑥教師やクラスメートとタイ語で討論できる。	×	△
	⑦口頭表現で適切なタイ語の音韻と発音が使用できる。	×	△
	⑧中国語とタイ語を互いに通訳，翻訳できる。	×	△
	⑨グループ会話で，タイ語で交流する習慣を養う。	−	−
	⑩古典，現代の詩，詞を読み，詠唱する興味と能力を養成する。	−	−

各段階	ピンイン能力	基礎編	応用編
第 1 段階 1-2 年生	①基本的なピンイン符号が認識できる。	△	×
第 2 段階 3-4 年生	①ピンイン符号の声母，韻母，音調が認識，読める。 ②ピンイン符号を使って，聞く話の能力を向上させる。	△ △	× ×
第 3 段階 5-6 年生	①日常生活で常用の語彙と短文はピンイン符号で使って発音できる。 ②日常生活で常用の語彙と短文はピンイン符号で使って書ける。 ③辞書を引く，資料などを調べる時，ピンイン符号から調べることができる。 ④ピンイン符号の学習は科学技術やメディアを利用することができる。	△ △ △ －	× × × －
各段階	読む能力	基礎編	応用編
第 1 段階 1-2 年生	①タイ語を読む基本の能力を養う。 ②タイ語の読物を読むことを好む態度と習慣を養う。	－ －	△ －
第 2 段階 3-4 年生	①タイ語の語彙と文が読め，その意味もわかる。 ②タイ語の常用の語彙や短文が読める。 ③読む能力を向上させるため，タイ語の辞書や他の図書などを大体使用することができる。 ④タイ語の読む能力を向上させるため，図書館を利用する習慣を養う。 ⑤タイ語を読む，よい態度と習慣を養う。	△ △ － － －	△ △ － － －
第 3 段階 5-6 年生	①タイ語の文を読んで意味を理解する時，ピンイン符号や文字を利用することができる。 ②タイ語の詩を読んで，その意味と美的感情がわかる能力を養う。 ③読む能力を向上させるため，タイ語の辞書や他の読み物などを使用することができる。 ④タイ語の閲読習慣と，人と討論，意見の共有の習慣を養う。 ⑤タイ語の閲読を通して，台湾の文化と多文化を理解する。	△ × － × △	× － － △ ×
各段階	書く能力	基礎編	応用編
第 1 段階 1-2 年生	なし	－	－
第 2 段階 3-4 年生	①タイ語の基本の常用の語彙と文を聞いて書ける。 ②タイ語の基本の語彙と文法の入れ替え練習ができる。 ③簡単なタイ語を作文する時，ピンイン符号を補助として利用することができる。	× △ ×	△ △ △
第 3 段階 5-6 年生	①簡単なメモ，ハガキとスローガンなどをタイ語で書くことができる。 ②自分の感情と要求，人に関心を示すことばをタイ語で書くことができる。 ③タイ語の作文の能力を向上させるために，ピンイン符号を使うことができる。 ④タイ語のマスメディア教材や図書や WEB 検索を利用し，作文の補助とすることができる。	× × × －	△ △ △ －

注：「○」：問題なし，「△」：改善余地あり，「×」：問題あり，「－」：評価不可能

価は，表 2 に示す。基礎編と応用編の各内容から学習できる 5 つの能力（聞く能力，話す能力，ピンイン能力，読む能力，書く能力）は，それぞれの学習段階によって異なることがわかる。第 1 に，聞く能力において，基礎編から学習できる能力は各段階の評価がほとんど同じようにみられるが，日常生活の短い会話文が聞き取れることや，教師の話が大体わかる，などという目標は達成が難しくはないので，低学年の児童・生徒にとっては，「問題がない」，「改善余地あり」と判断している。しかし，高学年で達成すべ

き条件には，タイ語の声調の変化，音韻，変音や発音の差異などがわかることが必要なのだが，基礎編ではそのような練習がデザインされていないので，評価が低くなったという「問題がある」と考えられる。目標の全体の 3 分の 1 ほどしかできないと考えられる。それに対して，応用編から学習できる聞く能力は学年が高ければ高いほど，それらの能力を身に付けることができると考えられるため，「改善余地あり」であるが，大多数の目標を達成するのが可能であると判断している。他方，著者が評価できない場合もある。例えば，タイ語を学習する興味と習慣を養うことやタイ語の音声に耳を傾ける習慣と態度を養うことなどの問題に対して，評価できないので，「評価不可能」という評価を与えている。

第 2 に，話す能力において，基礎編と応用編の学習は逆の結果が示された。基礎編から学習できる話す能力は，学年が高ければ高いほど，その評価が低くなる。なぜならば，基礎編の内容によって，生活会話の文章が多いが，練習問題で発音の練習や会話場面の練習がデザインされていないにもかかわらず，高学年に行くと，「流暢なタイ語で生活経験やプレゼンテーションや物事の解説と分析などを話す高い能力が必要である」，という「言語学習の能力指標」による目標を達成できないため，「問題がある」と判断している。つまり，基礎編は，高学年の児童にとって「言語学習の能力指標」が定められた目標に対して，その内容が不十分であると言える。言い換えると，応用編の会話文の内容は基礎編より難しく，更に，練習問題に，タイ語の単語や文を読む時，声に出して言うという指示があるので，高学年生は話す能力が伸ばせると考えられる。無論，態度や習慣を養うというものに対して，著者が評価できないので，「評価不可能」という評価を与えている。

第 3 に，ピンイン能力において，「言語学習の能力指標」によると，学年が高ければ高いほど，高いピンイン能力が要求されるので，それぞれの評価は低学年から高学年まで大きな問題点がないが，完全に問題なしと判断することができない。つまり，低学年生に，ピンイン符号という概念をもたせればよいということより，ピンインの練習問題などをより多く作って，児童にピンインの練習の機会を多くもたせれば，学習上さらに役に立つと考えられる。一方，なぜ，応用編におけるピンイン能力の評価は，基礎編より問題があるのだろうか。それは，応用編に行くと，基本的な語彙や作文の能力がある程度できているので，ピンイン符号の練習機会が少なくなると考えられるためである。

第 4 に，読む能力において，タイ語を読む，よい態度と習慣を養うことや，辞書や他の図書を利用すること，などの能力指標に対して，個人差による考察はしにくいため，基礎編も応用編も多くの場合は「評価不可能」で判断している。さらに，高学年になると，タイ語の詩や詩歌・歌詞文章への理解などの要求があるが，『新住民母語生活学習教材』には，基礎編でも，応用編でも，古典と現代の詩や詩歌・歌詞は紹介されていな

いので，「問題がある」という評価をした。

第 5 に，書く能力において，教育部は母語以外の言語を学習する場合，書くことより，聞く，話す能力の方を重視しているため，低学年の児童が書くことを学ばなくてもいいと考えているということがわかる。中学年から書く練習が始まるが，基礎編における書く練習は単語だけで少なく，作文練習がデザインされていないので，「問題あり」と判断している。また，高学年では，基礎編の書く練習が欠けている。無論，タイ語で自分の感情と要求，人への関心を示すことばをタイ語で書くことや，メモやハガキを書くことという書く能力の目標に達することが難しい。一方，応用編の第 16 課から第 30 課まで，すべて作文の練習があるので，高学年の児童にとっては，比較的簡単に目標を達成できると考えられる。

上記のそれぞれの能力指標に対する分析結果から，『新住民母語生活学習教材』は，基礎編と応用編という 2 つの学習内容だけで分けられているが，不十分だと言えよう。また，新移民の母語・文化を学習するコースでは，低学年の児童から高学年の児童まで，誰でも自由に授業を取ることができた（全国新住民火炬計畫成果展の報告書，2013）。つまり，現在，このコースでは一つのクラスに学年の異なる児童が混在しているのである。この点に対して，言語教育の視点から，学年による学習段階を分けて，クラスを設けることが大事であるということが本研究の分析結果から明らかになった。

3-4. 『新住民母語生活学習教材』に対する他の注意すべき点

第 1 の会話内容に，基礎編の第 1 課から第 15 課までの会話内容の部分においては，台湾と新移民女性の母国文化を分けて紹介する部分で，台湾文化と新移民女性の母国文化の相違点が見えてくる。しかし，新移民女性の母国の文化に関する内容には，写真のみ，その外国の文化がたくさん紹介されている。会話文から，外国のみ特別なことばや言葉遣いなどの内容が極めて少ないと言えよう。すなわち，例えば，タイ語の教材の第 10 課では，タイの三輪タクシーを紹介する時，タイ語で「トゥクトゥク」という発音の単語を教える。そのような台湾文化と全く異なって，新移民女性の特別なこと（語彙や文など）は，他のレッスンではほとんど教えていないということを指摘したい。

また，基礎編の第 1 課から第 15 課まで，単純な構造から複雑な構造へと文法を紹介していないので，それぞれのレッスンの会話内容が，簡単なように見えるが，実は難しい。特に，初心者である児童にとって，勉強する時，ポイントを把握しにくいという欠点があると指摘したい。さらに，応用編に入って，第 16 課から第 30 課までの会話内容の部分は，台湾の文化，日常生活の会話を主として編成している部分があるので，新移民女性の母国に関するものを学ぶことができない。つまり，応用編における会話文は，ただ新移民女性の母語で訳した台湾人の生活に関する内容だけである。

第 2 の新出単語に，各レッスンの新出単語のリストには，重要な単語を明るい色で表記し，補助的な単語を黒色で表記しているため，単語の重要さがわかりやすい。また，重要な単語は各レッスンで 10 単語だけが選出されている点は，重要な単語を覚える時，あまり負担がかからない。それらは児童にとってメリットだと考えられる。

しかしその一方で，たとえ重要な単語は 10 語しかなくても，補助的な単語と合わせると，一部のレッスンの内容に最多 40 語程度もある。特に，基礎編においても，新出単語が 40 語もあることのは単語量が多いと考えられる。次に，各レッスンの新出単語のリストには，単語の順を会話本文に対照すると，一定の順序で単語を収録せず，単語を無規則に並べたので，勉強しにくい。さらに，すべての新しい単語が集録されているわけではない。例えば，会話本文に今まで勉強したことがない単語が誤って集録されたことや，入れ替え練習に新出単語も集録されていないことなどがある。さらに，単語の品詞を表記解明していないので，そのことばを使用する時，誤用する可能性が高いという心配がある。

第 3 の単語の入れ替え練習に，そのレッスンの新出単語をもう一度復習，練習することができるという利点がある一方で，一つか二つのみのセンテンスを入れ替える練習だけでは少ない。

第 4 の「文化教室」に，この「文化教室」に述べられた新移民女性の母国文化は，丁寧に詳しく紹介されたため，その国の文化をより理解することができる。また，たくさんの写真や図表を載せているので，異文化の物事に対して，文字のみで描写する内容より，写真や図表から理解してもらえば，強く印象に残ると考えられる。さらに，「文化教室」において，すべて台湾の中国語（台湾のピンインもつける）で新移民女性の母国文化を紹介しているので，初心者である児童にとって，難しい外国語を勉強しなくても，この教材から外国文化を勉強できる。

しかし，その点に対して，逆に考えると，台湾の中国語のみで紹介することは，その新移民女性の母語を勉強することができない。また，「文化教室」の文章は長くて 1 ページを超えて紹介するものがほとんどである。それだけではなく，難読の中国語用語や難しい専門用語も多く見られるため，教師としての新移民女性と児童に負担をかけるのではないかという疑問をもつ恐れがある。「文化教室」内容に対しては，最も指摘すべきなのは，文章が長すぎることと奥深くて難しいことばがたくさん使っているということである。たとえ内容はすべて台湾の中国語で書かれていても，台湾で生まれ育った「新台湾之子」，あるいは，一般の子どもにとって，文章が長すぎる場合，小学生は学習する時，興味をもたなくなったり，勉強の効果が低くなったりするかもしれない。無論，教師である新移民女性にとって，授業中，奥深くて難しい中国語の長い文章を読み聞かせたり，教えたりすることが，どれだけ大きな負担になるか，ということは想像で

きることである。

第 5 の童謡・歌に，新移民女性の母国の童謡・歌を紹介することは，児童は童謡・歌からその文化やことばを勉強できるというメリットがある。しかし，残念ながら，ぞれぞれのレッスンにおいて，必ずしも童謡や歌を紹介しているとは限らない。特に，応用編に入ると，童謡・歌のパターンが削除されているということに疑問をもつ。

第 6 の練習問題に，最後の練習問題において，単語を書く練習，読む練習，入れ替え練習，組み合わせ練習，作文の練習などの様々な練習があるので，このレッスンに対してもう一度，重要な部分を復習することができる。しかし，それぞれの練習問題の分量は少ないため，学習効果がどのくらいあるの，不明であると指摘したい。

4. 結　論

4-1.「たいまつプログラム」における言語教育環境と言語教材

現在,「たいまつプログラム」は，いったん終了しているが，新移民女性の母語や母国の文化を教えるコースは今後も再開する可能性が高いという情報はある。過去の 3 年間にわたって実施した「たいまつプログラム」における新移民女性の母語教育のコースの終了に伴い，さまざまなの問題点が浮かびあがった。児童の意志で朝一の自習時間（授業開始前の 30 分程の自習時間）を利用して，自由に母語のコースを選択した結果，参加した人が少なかったという問題があった。そして，新移民女性を教師として授業を行う場合，教師の質保障の問題，教員養成などの問題や，また，今後，政府はその新移民女性の母語の言語教育が教育課程としてどのように位置づけになるのか，これらの問題点は，今後同じようなコースを再開する際，一刻もはやく改善・解決すべきだと考えられる。

著者は，3 年間徹底的に「たいまつプログラム」を実施していた台湾の新北市にある A 小学校へ，何回も授業観察を行った。それだけではなく,「たいまつプログラム」に対して一番熱心をもつその A 小学校の校長先生，その授業に関わる各関係者，新移民女性である教師たちなどにも，インタビューした結果,「たいまつプログラム」の実施が，台湾社会や新移民に有意義な影響をもたらしたことを深く理解できた。2012 年から 2015 年までの「たいまつプログラム」を実施したことから，それぞれのメリットとデメリットを探り出すことができたものと思われる。例えば，小学校における言語を学習する教育現場では，学年によるクラス分けが重要である。小学生の言語教材は，学年による学習者のレベルも何段階を分ける必要がある，というようなことなどが本研究の結果から明らかにされた。

また,『新住民母語生活学習教材』（タイ語の教材）を分析した結果，その教材は言語

教材として質の高さは認められるものの，小学生にとっては，学習しにくいところが少なくないことが明らかである。特に，低学年と中学年の児童を学習対象者とする場合，文章の長さや語彙の難易度などを注意する必要がある。つまり，小学生より，むしろ大学生や社会人の方が，その教材の勉強に向いているという本研究の結果から示唆が得られている。さらに，『新住民母語生活学習教材』における「文化教室」の内容に対して，異文化の理解というメリットがあるが，それを教える教師とそれを勉強する児童の立場から考えると，逆に教授と学習を難しいものにしていることがうかがえる。

さらに，本研究の結果から，今後，新移民女性の母語の教材を編成する際には，学習の対象者によって難易度に差をつけた教材作り，あるいは，より適切な内容や注意すべき点などが，具体的な明らかにされた。

それ故に，それぞれの長所や短所を理解した上，改善すべきところを注意して修正できれば，今後，「たいまつプログラム」のような授業を再開する際，よりよい言語教育教材や言語教育環境を作ることができる。「幸いなことに，新移民女性の母語や文化を継承する問題点・困難点に対して，台湾は比較的早期に認識することができた。それらの問題点を解決し，困難点を克服すれば，台湾は多言語多文化社会を実現することを一歩大きく邁進することができる」と A 小学校の校長先生は述べている。

4-2. 本研究の限界と今後の課題

『新住民母語生活学習教材』のそれぞれのベトナム語，インドネシア語，タイ語，ミャンマー語，カンボジア語のすべての教材の収集することは無理であったため，本研究では，ベトナム語，インドネシア語，タイ語の 3 言語のみに絞って，その内容に関する例を取り上げ，検討・分析した。また，5 つの言語教材の編成内容はほとんど同じであることが推測できるが，タイ語の教材を中心に分析したため，他の言語教材との比較や，他の言語教材の細かく部分まで評価を与えたり分析したりすることができなかったという問題が残っている。本研究では，「教科書・教材の評価指標」および「言語学習の能力指標」を基準にし，評価して分析したものの，『新住民母語生活学習教材』に関しては，より確実に評価できる複数の評価者の協力を得て，より客観的な分析を行うことは，今後の検討課題としたい。具体的に言うと，教材の編集者や教師などからのその言語教材への評価をたくさん得て，量的なデータを得た後に，統計的な手法を用いて，改善点を具体的により明確にできれば，よりよい適切な教材を作ることができると考えられる。さらに，この「たいまつプログラム」を 3 年間実施した成果をまとめると，教材についての問題は本研究でも指摘されているが，各学校での裁量の問題，新移民女性としての教師の質保障問題，さらには言語だけの問題ではなく，少数文化，多文化共生をどのように伝えるのかについての問題の研究は，今後の課題としたい。

注

(1) 重点小学校とは，新住民の子どもは100名以上を占める場合の学校，または，新住民の子どもは10分の1小学生数を超える場合の学校，どちらの条件を満ちると，その学校が全国新住民たいまつプログラムの重点小学校になれるということである。

(2) 山ノ口（2008）は，「国民中小学九年一貫課程綱要」は，日本の小学校と中学校の学習指導要領に相当する「課程標準」であったと指摘している。また，台湾の「課程標準」は日本と同様に，法的な拘束力があり，国の教育政策に合わせた使命を果たしてきたと山ノ口（2008）は強調している。

(3) 2003年，九年一貫課程の新学習領域による新学習領域は，「言語」，「健康と体育」，「数学」，「社会」，「芸術と人文」，「自然と生活科技」，「総合活動」という7つの領域がある。それらは，従来の11「教科」が7つの「学習領域」に再編されたものである（浜島，清，白間，2009）。それぞれの旧教科は新学習領域との関係について，具体的に言うと，①「国語」の教科から「言語」学習領域になり，②「健康」，「体育」の教科から「健康と体育」学習領域になり，③「数学」の教科から「数学」の学習領域になり，④「社会」，「道徳」の教科から「社会」学習領域になり，⑤「音楽」，「美術」の教科から「芸術と人文」学習領域になり，⑥「自然」の教科から「自然と生活科技」学習領域になり，⑦「団体活動」，「補導活動」，「郷土教学活動」の教科から「総合活動」学習領域になる（浜島，清，白間，2009）。

(4) 教科書・教材の評価指標を基準にし，7つの学習領域に適用され，さらにそれぞれの評価目標（基本理念，「要点」，使用の説明など）が詳しく定められた（教育部，2003）。例えば，「言語」学習領域における「国語」の教科書・教材の評価指標，「芸術と人文」学習領域における「音楽」，「美術」，に関する教科書・教材の評価指標などがある。

(5) 山ノ口（2008）は，教育の「本土化」とは，権威主義体制下の教育において軽視されていた台湾の歴史，地理，社会，言語，芸術などを公教育の内容に取り入れていくことを意味していたと指摘している。

引用文献

Chang, Y.（陳依玲）（2008）「語言教育政策促進族群融合之可能性探討」『教育研究與発展期刊』4号：223-249

浜島京子・清百世・白間有希（2009）「台湾の新課程綱要および小学校段階における家庭生活関連学習について」『福島大学総合教育研究センター紀要』7号：25-34

Huang, W.（黄琬茜）（2014）「“外籍”の配偶者のもつ文化とことば：その家庭への影響と伝播」『教育文化』23号：63-85

JiaoYuBu 教育部（2003）『國民中小學九年一貫課程教科書評鑑指標』

Lan, Sh.（藍順德）（2006）『教科書政策與制度』五南圖書出版社

中川仁（2009）『戦後台湾の言語政策－北京語同化政策と多言語主義－』東方書店

NeiZhengBu 内政部・JiaoYuBu 教育部（2013）『全國新住民火炬計劃：新住民母語生活學習教材－泰國』

NeiZhengBu 内政部・JiaoYuBu 教育部（2013）『全國新住民火炬計劃：新住民母語生活學習教材－越南』

NeiZhengBu 内政部・JiaoYuBu 教育部（2013）『全國新住民火炬計劃：新住民母語生活學習教材－印尼』

QuanGuoXinZhuMingHuoJuJiHuaChengGuoZhanBaoGaoShu 全國新住民火炬計畫成果展の報告書（2013）『2013年移民政策國際研討會暨全國新住民火炬計畫成果展（2013 International Conference on Immigration Policy and New Immigrants Torch Program Achievements Exhibition）』

山ノ口寿幸（2008）「台湾「国民中小学九年一貫課程綱要」の策定と七大学習領域の誕生－カリキュラムスタンダードからカリキュラムガイドラインへ－」『国立教育政策研究所紀要』137号：261-270

Zhen, X.（詹秀娟）（1996）「香港・台湾の歴史と言語事情」『新潟産業大学人文学部』5号：33-52

電子メディアの引用

JiaoYuBu（教育部）（2008）「九年一貫課程綱要語文學習領域（閩南語）」
http : //www.edu.tw/Advanced_Search.aspx?q＝九年一貫課程綱要語文学學習領域（2016. 1. 12）

JiaoYuBu.（教育部統計処）（2013）「新移民子女就讀國中小學人數統計（94-101 學年度）」
https : //stats.moe.gov.tw/files/main_statistics/fomas.xls（2015. 11. 23）
NeiZhengBuTongJiChu（內政部統計処）（2015）「103 年底在我國之外籍人数」
http : //www.moi.gov.tw/stat/news_list.aspx?page = 1（2015. 11. 18）
NeiZhengBuYiMingShu（內政部移民署）（2012）「全國新住民火炬計畫」
http : //www.immigration.gov.tw/mp.asp?mp = TP（2015. 10. 22）
RuChuGuoYiMingShu（入出国及移民署）（2013）「外籍配偶数與大陸配偶人数」
http : //www.immigration.gov.tw/np.asp?ctNode = 29698&mp = 1（2015. 11. 18）

Explore the Language Education Methods in Taiwan National New Immigrants Torch Program :

Some Analysis of “New Immigrants’ Mother Language and Life Learning Materials”

Wan-Chien Huang

As the number of international marriage has increased, the number of new Taiwanese children attending school is climbing. In 2012, there were more than 200,000 new Taiwanese grade-school and middle-school students. The Taiwanese government has observed the time for a multi-cultural society to come. The government has actively implemented policies and programs to help new immigrants integrate into the society. The National “New Immigrants Torch Program” was one of the famous projects, which was school-based. The intention of the program was to narrow the gap between the new immigrants and the society. The program offered a course focusing on the heritage of the immigrants’ mother languages. The government has also published a set of textbook named “New Immigrants’ Mother Language & Life Learning Materials”. However, it was hardly used in the course.

The main purposes of this study are to analyze the design of the material, to explore its strengths and weaknesses, to see if it is suitable for children to learn new languages, and to give consideration to the reasons why it did not win the teachers’ favor.

Key words : National New Immigrants Torch Program, Education methods, Language materials, New Taiwanese Children, Mother language